

ニューズレター第七号

ドイツ現代史研究会ニューズレター第7号（2006年8月）

内容

- ・ドイツの政治教育を語ること（近藤孝弘）
- ・2006年度研究会代表より挨拶（丸島宏太）
- ・会員の近著から（2006年1～6月）

ドイツの政治教育を語ること 近藤孝弘（名古屋大学教員）

『ドイツの政治教育』などという本を書きおいて、いまさら申し上げるのは大変恐縮なのだが、ドイツの政治教育について語る際には、いつも若干の躊躇がついてまわる。

初めにこの躊躇を感じたのは、この本を書くことを可能にしたドイツ滞在中（2003-04）のことである。研究を進める過程でインタビューをさせていただいた方——政治教育学者と政治科教員が主だが——は、ほとんど例外なく、少なくとも最初のうち「なぜ東洋人がドイツの政治教育なんかに興味を持つのか？」という視線を私に向けてきた。

彼らにとって、私が用意したいくつかの問いはエキゾチックなものだったようだ。

私の聞き方が悪かった部分は当然だろう。しかし、それだけでなく、彼らが自分たちの政治教育を外国に向けて発信するという発想・経験を持っていないことが、あのような態度の背景にあるように思われる。

そう言えば、ドイツの大学は、あれだけ多くの留学生を抱えていながら、政治教育学講座では外国人学生を全くと言って良いほど見ない。ネイティブでローカルな世界がそこに広がっている。

そうした世界に暮らす彼らにとって、アウトサイダーである私と政治教育について話すのは、明らかに慣れていないことのようなのである。そして、そういう彼らと拙いドイツ語で込み入ったことを話すのは、私にとっても楽なことではない。少なくとも、ドイツの政治

教育についてドイツ人の関係者と話す時間は、相手の言っていることを確信をもって把握できない自分の知識不足を痛感させられる時間に他ならなかった。

さて、帰国すると——さらには本まで書くと——、いろいろな研究会や講演会にお招きいただくことになる。こういう貴重な機会は、自分の勉強のためにも可能な限りお引き受けしてきたが、いざ発表の準備をするとなると、やはり躊躇がついてまわることになる。どう話せば良いのか……？ と。

日本の教育関係者の圧倒的多数にとって、*politische Bildung* という言葉は単なるアルファベット 17 文字にすぎない。「非ナチ化」や「68 年世代」あるいは「オスタルギー」という言葉の説明だけで、それぞれかなりの時間を費やしてしまう。こうして私の話は、いつの間にかドイツ社会史概論のようになり、問題を共有する遙か手前で時間切れを迎えてしまわざるを得ない。

他方、今回のようなドイツ現代史研究者を前にした発表は、上のような困難が生じない一方で、私の思考の一部を占めている——一部でしかないのだが——教育学的な関心が、必ずしも前提として共有されていないという不安の上でなされることになる。

結局のところ、実は、こうした不安や躊躇というのが拙著のかすかな存在意義を支えているのであって、本来はこれをむしろ楽しむべきなのだろうが、そういう心境に到達できるのは、まだまだ先のことになりそうである。

自分のことはさておき、このようにドイツの政治教育というものが日本で一般に知られていない理由は、いろいろ考えられるだろう。

まず、なんと言っても外国の教育に関心があるという人間は、どこの国でもごく少数だと言わなければならない。上に述べたようなドイツの政治教育学者の状況は特別なことではなく、また、彼ら自身、外国の政治教育については、あまり知識も関心もないのである。

しかし、近代化に遅れをとった（？）日本には外国の教育をお手本として学んできた歴史があり、さらに世界的に見ても層の厚いドイツ史研究の実績がある。そして、実際に 1960 年前後までは、その政治教育についても一定の関心が払われていた。

それが、いまのような状況になったのには、やはり、それを学ぶに値するものとは見ない感覚が日本に広まったことが関係していよう。そもそも「ドイツに学ぶ」という発想そのものが、いまでは古めかしく映る。ドイツを模範とするという姿勢は、もはや私たちの生活感覚にあっていない。

ただ、このことが、その政治教育についての知識を無価値としてしまったとすれば、やはり残念だと私は思う。

確かにドイツの政治教育は、拙著の中で指摘し、研究会でも述べたように、冷戦下では反共主義に加担する——と言うか推進役そのものだった——など、多くの問題を抱えた存

在である。それでも、そこには注目すべきこともあるのではないだろうか？ 60年代に私たちがそれを見切ってしまったのは、早すぎたのではないだろうか？ むしろ、いまドイツに学ぼうと思っても手が届きそうもないという諦念こそが、私たちの社会の現実を示しているのではないだろうか？ ドイツの政治教育を語るという気の重い仕事に私を向かわせてきたのは、こうした疑問だったと言って良いだろう。

さて、この忍耐の成果については、読者そして研究会の参加者のみなさんに御判断いただくほかはない。「ドイツに学ぶ」のではなく「ドイツで学ぶ」、つまりドイツを触媒のように利用して自らの思考を深める、という日ごろ学生たちに言っていることが実践できていれば良いのだが。

2006 年度研究会代表より挨拶 丸島宏太（姫路獨協大学教員）

私をはじめドイツ現代史研究会に参加したのは今を去ること 20 年以上の昔、1985 年夏のことでした。当時博士後期課程に進学したばかりの私は、歴史畑の出身でなかったこともあり、ドイツ史の関係者にはまったくと言っていいほど面識がなかったのですが、良きにつけ悪きにつけ、来る者拒まず去る者追わずのこの研究会は、その後私が研究者としての道を歩む上でかけがえのない導きの場となったのです。今回、心ならずも会の代表に就任することとなりましたが、もうそんな立場になったのかと思うといささか複雑な気分ではあります。

ドイツ現代史研究会が存続の危機にあると言われてから久しくなります。確かに東京の現代史研究会や京都の近代社会史研究会などでは今でも、例会の日程を定めれば報告者がつぎつぎ名乗りをあげるという状況が続いているようです。これにたいして執行部経験者なら誰でもご存じのように、当会の例会での報告者探しは容易ではなく、会員以外の方に報告をお願いすることも少なくありません。実際、人捜しの大変さから執行部を引き受けたくないという方も少なくないようです。それに、せつかくの例会にもなかなか出席者が集まりません（かく言う私も、現在の会場である京都キャンパス・プラザには 3 月の役員引き継ぎではじめて行ったという怠慢ぶりです）。

もちろん、研究会の現状を打破しようという動きは過去にも何度かありました。私がとくに記憶に残っているのは井上茂子、高橋秀壽の両氏が執行部を勤めた 1996 年度で、このときは「自分が参加したくなるような例会にしよう」を合い言葉に、ファシズムのようなテーマを掲げた一連の例会、ドイツ史以外の研究者も巻き込んだ大規模なシンポジウムな

ど、起死回生のためのさまざまな企画が打ち出され、それなりの成功を収めたように思います。確かにこのときの経験はその後の研究会運営に大いに参考になりました。ただ、毎月のように例会が開かれる研究会は組織としての性格上、こうした「アドバルーン」路線を恒常的に続けるわけにはいかないでしょう。

研究会活性化の試みが繰り返しなされる一方で、もはやドイツという枠組の研究会に存在価値が無くなったのだ、という悲観的な意見も少なくありません。歴史研究の細分化は救い難いまでに進行し、同じドイツを舞台にしながらも共通の言葉・関心・概念で語り合える研究者がどんどん少なくなっているという事実は、誰しも経験していることです。その点、具体的なテーマのもとにプロジェクト・チーム的な研究会を組織するほうが有益な成果が得られる。それならばドイツ現代史研究会はその役割を終えたものとして、いっそのこと発展的に解散してしまおうか——そんな過激な意見も聞いたことがあります。しかし、いったん解消してしまったものをふたたび立ち上げるのは、想像以上に困難なことです。それにドイツ現代史研究会は、果たして解散してもよいほどにその存在価値を失ってしまったのでしょうか。

ここで私は、自分が院生時代にこの研究会とどう関わってきたか思い返してみます。私はこの研究会の場を通じて、当時ドイツ近現代史研究の第一線で活躍しておられた諸先生方と親しくなることができました。当時、西洋史関係の知人はないに等しかった一匹狼の私は、研究会の例会とその後の懇親会で気楽に（図々しく）諸先生方と話げできたことにより、知的刺激を受けただけでなく、人間関係をつくる足がかりを築くこともできました。人脈もなく、まだ学問的方向性も定まらなかった私のような半人前の院生が、特定のテーマをもとに結成されたプロジェクトなどに参加させてもらえるはずもありませんでしたから、小規模ながらも定期的に例会が開かれる研究会が存在していなければ、私はいつまでたってもドイツ史研究者の世界にアプローチすることはできなかつたでしょう。このようなアクセスのし易さ、人間関係のつくり易さは、常設の「家内工業的」研究会ならでのことです。もちろん、大家と言われる先生方の話を間近で伺えたことも、研究会の大きな魅力でした。何しろ会員でさえあれば、わざわざ他人の紹介を介さなくともこうした話を聞く「権利」があるのですから。

今日、歴史研究がドイツのような地域の枠にとらわれない視野を必要としていることは、言うまでもありません。とはいえ、研究者の道を志して間もない院生の多くには、やはりドイツ、イギリス、フランスといった地域が研究の土台となるでしょう。それに、グローバルな視角から研究をすすめる研究者の多くも、軸足となる地域なり国があるものです。ここにも「ドイツ」という名を冠した研究会の存在意義があるように思います。

これからもドイツ現代史研究会は、ときには大きな「アドバルーン」も上げつつ、若手

研究者のデビューの場として、第一線の研究者からの話題提供の場として、あるいはドイツを軸足としながら他地域・他分野の研究者との意見交換の場として、地道ながらも堅実に運営されるべきだと考えます。若手の皆さんは例会・懇親会を通じて、大家・重鎮と言われる先生方と積極的に接して行って欲しいと思います。研究職にある皆様は、「完成品」的な報告でなくとも試論的な報告をしていただく場として、さらには若手研究者育成に手を貸す場として参加いただければ幸いです。

会員の近著から（2006年1～6月）

- ・ 大津留厚編『中央ヨーロッパの可能性』昭和堂（2006年2月）
- ・ フランク＝ロタール・クロール著、小野清美・原田一美訳『ナチズムの歴史思想 現代政治の理念と実践』〈パルケマイア叢書 20〉柏書房（2006年2月）
- ・ Tetsuji Senoo, "Willy Brandt's Ostpolitik and West European Integration: Egon Bahr's Concepts and the Western allies", in: Globalisation, Regionalisation and National Policy Systems Proceedings of the Second Anglo-Japanese Academy, 7-11 January 2006, The International Center for Comparative Law and Politics, Graduate School of Law and Politics, the University of Tokyo (ICCLP) Publications No.9, 2006, pp. 425-451.
- ・ 竹中亨「ジャポニズムから世紀末の憂鬱へ 19世紀末のオーストリアにおける日本観」*Journal of History for the Public* 第3号（2006年2月）
- ・ Toru Takenaka, Foreign Sound as Compensation. Social and Cultural Factors in the Reception of Western Music in Meiji Japan (1867-1912), Floodgates Technologies, Culture <Ex> Change and Persistence of Place, Susan Ingram, Markus Reisenleitner and Cornelia Szabo-Knotik (eds), Peter Lang (2006年1月)
- ・ アンドレーア・シュタインガルト著、谷口健治・南直人・北村昌史・進藤修一・為政雅代訳『ベルリン 〈記憶の場所〉を辿る旅』昭和堂（2006年4月）
- ・ W・E・フォン・ケテラー著、桜井健吾訳『自由主義、社会主義、キリスト教』晃洋書房（2006年6月）
- ・ 田村栄子編『ヨーロッパ文化と〈日本〉 モデルネの国際文化学』昭和堂（2006年4月）
- ・ 坪郷實「ドイツ総選挙とメルケル大連立政権のゆくえ」『自治総研』2006年1月号
- ・ 馬場優『オーストリア＝ハンガリーとバルカン戦争 第一次世界大戦への道』法政大学出版社（2006年2月）
- ・ 姫岡とし子「欧米ジェンダー史」『歴史と地理』第591号（2006年2月）

- ・村上宏昭「『ユダヤ人』表象の変貌——マルクス・ヴェーバー・ゾンバルト」『史泉』第 103 号（2006 年 1 月）、1-16 頁。
- ・村上宏昭「『近代資本主義』概念の確立——マルクスからゾンバルトへ」『関学西洋史論集』第 29 号（2006 年 3 月）、39-50 頁。
- ・村上宏昭「世界を覆う経済と戦争——20 世紀のヨーロッパと世界」入江幸二・大城道則・比佐篤・梁川洋子編著『ヨーロッパ史への扉』晃洋書房（2006 年 4 月）、153-168 頁。
- ・森本慶太「新生期スイスの連邦論——I・P・V・トロクスラーを中心に」『史泉』第 103 号（2006 年 1 月）